

## 特集「エディタ」の編集にあたって

永 田 守 男<sup>†</sup> 黒 川 利 明<sup>††</sup>

プログラムや文書の作成にあたってエディタを利用する機会がととも増えてきている。コンピュータの利用者にとって最も身近に使うソフトウェアのひとつがエディタだと言ってもよいほどである。人間が付き合っている時間の長さの点からいっても、エディタには計算機システムの「顔」としての側面がある。

このように、多くのひとにとって馴染み深いものなので、エディタについての一家言を持つひととたくさんいるし、いろいろな新しいエディタの名前も聞えてくる。あるいは、少しでも前と異なる環境で仕事をしようとするは新しくエディタの使い方を憶えないと何もできないということもある。

そこで、現在広く使われているエディタや新しい特徴を持っているエディタを集大成すれば、本会会員にとっても有益であろうということになって本特集号が企画された。

しかしながら、現在のところエディタの利用と作製について学問的整理がなされているという段階には至っていない。したがって、採り上げる題材およびこれらの並べ方については、編集担当委員として次のような考え方をとった。

まず、エディタ全体を大きく二つに分けることにした。画面に出ているイメージをそのまま扱う「画面エディタ」と、プログラミング言語などの持つ構文上の構造に準拠した「構造エディタ」の二つである。

そして、この2種類についてそれぞれ「総論」を置

き、そのあと特徴的なエディタについての「各論」を掲載する。こうした範ちゅうで説明しにくいものは別にし、エディタについてのいろいろな考え方を最後に「エディタ観」としてまとめた。

本特集号は、エディタの利用者と設計者の双方にとって役に立つことを狙った。また、この号の内容が広い意味で人間と計算機とのコミュニケーションについてのソフトウェアとハードウェアを考えるとときのヒントにもなって欲しいと考えている。こうした編集幹事の期待に応じて充実した解説をお寄せいただいた執筆者各位と査読の労をとっていただいた査読者各位にまずお礼を申し述べたい。

なお、本特集号で特筆すべき点は、文書整形エディタの日本語 TeX の解説部分を活版印刷としないで、このシステムからの出力をそのままオフセットにしたことである。これは、解説の内容からしても意味のあることと考えて試験的に行ってみることにした。ただし、他の解説記事の刷り上がりの体裁にできる限り近づけるように工夫した。この点については、執筆者、学会の編集担当の方々に一方ならぬお骨折りを願うことになったし、会誌編集委員会のご了解もいただいた。併せて関係各位に深く感謝する。

編集担当者の非力から、会員諸兄姉の期待には十分答えられていない点、的はずれな点なども多々あることと思う。そういった点についてはご指摘、ご批判をいただくことにより、本特集号の内容をさらに充実したものを出すことができれば望外の幸せである。

<sup>†</sup> 慶応義塾大学理工学部管理工学科  
<sup>††</sup> 財)新世代コンピュータ技術開発機構研究所

(昭和59年6月14日)